

慶応11季ぶりV



優勝を決め抱き合って喜ぶ慶大選手たち—内藤絵美撮影

東京① 六大学野球 神宮

東京六大学野球春季リーグは31日、早慶3回戦を行った。慶大が早大を6-4で破って2勝1敗とし、勝ち点を4に伸ばして11季ぶり32回目の優勝を果たした。プロ経験のある江藤省三監督は、就任最初のシーズンでチームに栄冠をもたらした。早大の渡辺慎也（3年、福島・聖光学院）が3割8分1厘（42打数16安打）で首位打者を獲得、毎日新聞社からプロンス像が贈られた。（4面に江藤監督の「ひと」）

慶大は一回、バッテ

リーミスに乗じて2点を先取。早大の先発・斎藤（4年・早稲田実業）を序盤に攻略した。五回に山口（4年・慶応）の2ラン、六回には代打・伊場（3年・慶応）の適時打などで加点、早大の反撃を4点に抑

1日1000本 打撃練習が奏功

選手、指導者としてプロの世界を経験した江藤新監督に率いられた慶大打線が、秋のドラフトをにきわすことが確実な斎藤、大石らを擁する早大投手陣を打ち砕いた。

「アマとプロとの最大の違いは素振りの量」。江藤監督は昨秋の就任以来、素振りや

え逃げ切った。慶大の

竹内大（2年・中京大）が6勝目をマーク。3回で降板した斎藤は3敗目を喫した。

◎慶大2勝1敗
早大020002200006
慶大000002002004
勝竹内大（6勝2敗）
敗斎藤（2勝3敗）

ティー打撃などを徹底し、打撃の基本をたたきこんだ。スイングの

ノルマは1日1000本。優勝が懸かった早慶戦の1週間前には、

雨中3000本もの素振りを行ったという。

二回に右翼フェンス直撃の先制打を放った竹内（4年・慶応）は「徹底的に振り込ん

できた自信がある」と、おくせず打席に入った。五回に初球のスライダーをとらえ、左翼席にアーチをかけた山口（4年・慶応）も「練習をやってきた自信があるから、早めのカウントから勝負できる」と胸を張った。

そして、江藤監督がチームにもたらしたものは、これだけではない。3安打を放った竹内一は、今季ここまで無安打でスタメンも2回目。山口は本来1番打者で、中軸を務めたのは、この試合が初めてだった。

大一番で見せた勝負勘のさえ。大胆な采配（さいはい）に応えた選手たちは、11季ぶりにリーグの頂点へと上り詰めた。【岸本悠】

斎藤KO

○：早大最大の誤算は斎藤のKOだった。

二回1死二塁。竹内一に甘い直球を狙われ先制を許すと、山崎ら3人に12球連続のボール。暴投と捕逸が重なり、やらずもがなの2点目を与えてしまった。この4年間先発した試合では最短イニングで降板した斎藤は「秋に頑張る」と言い残したただけだった。